

孫たちと爺々のオリエンテーリング

No.36 あだたら高原大会 2007 年 6 月 10 日 福島県二本松市

武石雄市

あだたら高原大会スコアオリエンテーリングに挑戦した。

オリエンテーリングとは、地図をちらちら見ながら、とにかく走ることだ！

爺々の孫で第2シリーズ
野生的文化育成第2弾



あだたら高原大会。小雨模様の中の開会式

次男・三男を連れ出した

3 男坊の来生はやんちゃだが足がしっかりしていてどこに行くにも2歳上の綺羅と一緒に。来生だけを誘って連れ出そうとしても「綺羅は行く？」と綺羅の同行を確かめてからOKを出すほど一緒に行動を好む。そのくせ、スキーに連れ出すと自分の行きたい方向にどんどん進むから、目ばなしがならない。今回もこの二人を連れ出すのだ。



あだたら高原（二本松市岳温泉）のスコアオリエンテーリングマップ

競技時間は制限 60 分

最近の爺々はスキーやさくらんぼ大会の準備で忙しく、まったく走っていないので、身体の高齢現象と走力低下が心配だが綺羅君と来ちゃんなら60分の競技時間を一緒に頑張れそうだ。

スタート5分前に一人1枚のマップを渡された。

「わっ！！でっかい！！」

1:10000でA3版だ。調査・作図が渡辺研也氏で外形が南米ブラジルに似て美しく仕上げています。コントロールプランナーは安田忠寛氏でほぼ全部を線上特徴物に設置してあるが、ルートチ

ョイスにより時間消費が大きく変化する設定で、走力の無い家族組には小憎らしいほどだ。

スタート・ゴールが最南、標高も低地なので登りを頑張って復路をルンルン気分で行って来たいところだが、高低差が210mもある。かなりしんどいことがスタート直後の急坂で実感した。

わがチームは、爺々のリードで最初に208番に向かった。つい個人レースの癖が出て幼い孫を連れて近いルートの藪漕ぎをしてしまった。雨でぬれている草の水分で早くも全身びしょぬれだ。道路を迂回したグループも走力のある組は続々と登ってきた。

綺羅は心拍がマックス状態で「ハーハーハー」と激しい呼吸だが、2年年長なので来生よりは先を走る。でも、なんだかいっぱいっぽい様子だ。地図を見る余裕はまったく無い。

来生は綺羅と爺々の後から自分の走れるペースで走り、呼吸の乱れが感じない。時々地図を見ては次に進む番号を聞いてくる。爺々が番号を言うとそのまでのルートを読んでいるようだ。その証拠に302-303と進んで「次は何番？」と聞いてきたとき、爺々の勘違いで「402番！」と答えたら「爺々そっちの道を通ってないよ」と言う。やや不思議に思った爺々は帰宅後に地図を広げ、来生にルートチョイスを指で迎せたら所々であるが実際のルートを記憶で迎えることができた。

幼稚園の年長さんは地図が読めるのか？ それならお遊びで簡単な机上のオリエンテーリングが出来るかも知れない、と、爺々は思った。

残り時間が10分を切ったのに爺々の欲張りで来生の背丈ほどもある牧草地に踏み込み時間オーバーが3分、おま

けにラストも別イベントのコントロールをパンチして減点され得点は340点だった。



表彰式で「きららいき爺々」チームは家族組Bクラスで1位になり表彰を受けた。

福島県協会は磐石だ

あだたら高原大会は岳温泉観光協会・福島民報社の主催で第7回を数える。

競技部門主管の福島県協会は組織基盤が磐石で会員数も多く創立当初から歴代の会長（初代：佐藤克己、現在：高橋弘寿）が東北オリエンテーリング界の普及等に絶大な指導力を発揮している。

選手層も厚く、全日本やインカレの上位選手の多いことは驚嘆だ。毎年各種国際大会の派遣選手や国内エリートのルーツを辿ると福島県出身者が多いことも顕著で、WOC2007日本代表の番場選手、紺野選手も福島県出身だ。

県体協に加盟し国体で大会開催等、その実現に協会役員として活躍している加藤一郎氏の運営力は絶大である。

（武石雄市）